

荒川発！主体間連携によるパートナーシップを実現した環境保全活動 ～過去16年の軌跡と飛躍する17年目のクリーンエイド～

特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラム

はじめに

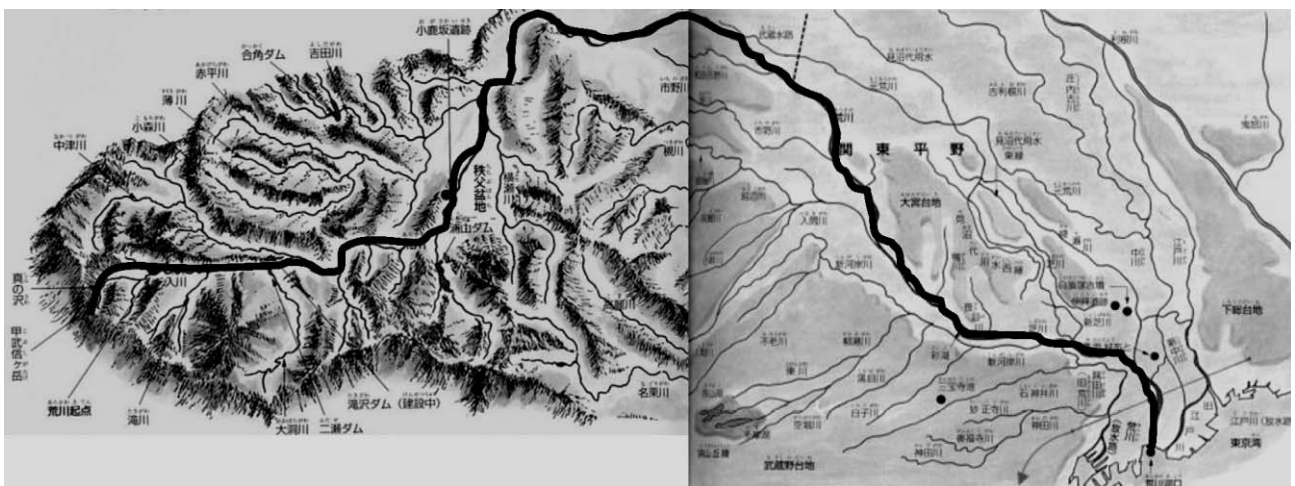
1994年に建設省荒川下流工事事務所(現国土交通省関東地方整備局荒川下流河川事務所)の呼びかけで始まった本活動は、2010年度で17年目を迎えました。本活動は、ゴミの内訳は何かを調査し、数えながらゴミ拾いを活動として、流域の至るところで実施されてきました。また、これまで年度ごとの散乱ゴミ(ゴミ袋に収まる大きさのゴミ)や粗大ゴミの収集結果をもとに、参加者に対して環境問題の気づきを促してきました。荒川という地域に密着した活動を展開しながら、累積参加者12万活動をサポートするという中間支援組織としての役割を担ってきました。そして、17年目を迎えた2010年度の活動は、①ゴミによって被害を被る自然の回復を目指し、②ゴミの減量社会に訴える情報発信の強化という視点を新たに加えています。

1. 荒川の状況

1) 地理的な状況

荒川は、埼玉県および東京都を流れ東京湾に注ぐ河川です。一級水系である荒川水系の本流で一級河川に指定されています。水系として、流路延長173km、流域面積2,940平方キロメートルになります。川幅(兩岸の堤防間の距離)は御成橋(埼玉県鴻巣市・吉見町)付近で2,537mになり、日本最大とされます。

埼玉県、山梨県、長野県の三県が境を接する甲武信ヶ岳(こぶしがたけ、2,475m)に源を発し、埼玉・東京を流れ、江東区と江戸川区の区境で東京湾に注ぐものです。



出典：荒川流域図
野村圭佑著(2000)「まわってめぐって みんなの荒川」



2) 環境・社会的な状況

現在、荒川には広大な水面とヨシ原などの水生植物群落や草地等が広がり、魚類、昆虫類、鳥類など多くの野生生物が生息する場で、東京の都心部では最大の水辺空間の一つとなっています。全国的に水辺環境への関心が高まっている中で、荒川は、都市と自然を巡る問題において、非常に重要な財産として期待されています。一方で、流域人口1千万人を抱える荒川流域において、上の写真のとおり、下流域のヨシ原には、甚大な量の漂着ゴミが堆積するという課題が顕在しています。

3) 漂着ゴミ問題の状況

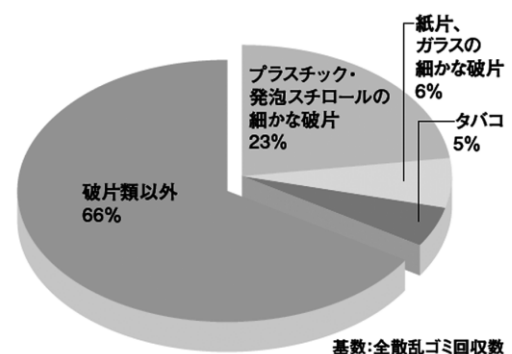
荒川のゴミは、不法投棄を含め、流域のあらゆる場所から、様々なルートで川に入り下流のヨシ原等に流れ着いたものが大半を占めます。これはまさに、あらゆるゴミが集積する“消費社会の縮図”といえるでしょう。こうした現状を受けて、荒川クリーンエイドでは、ゴミを種類別に数えながら拾い、拾ったゴミのデータを社会に発信してゴミの発生抑制につなげています。



① プラスチック類の破片

荒川で拾ったゴミの中には破片やその他の細かなゴミも多く含まれます。2010年度の割合において、プラスチック・発泡スチロールの破片が全散乱ゴミ数の約1/4を占め、紙やガラスの破片を含めると約3割が破片ゴミとなります。(図表1)。

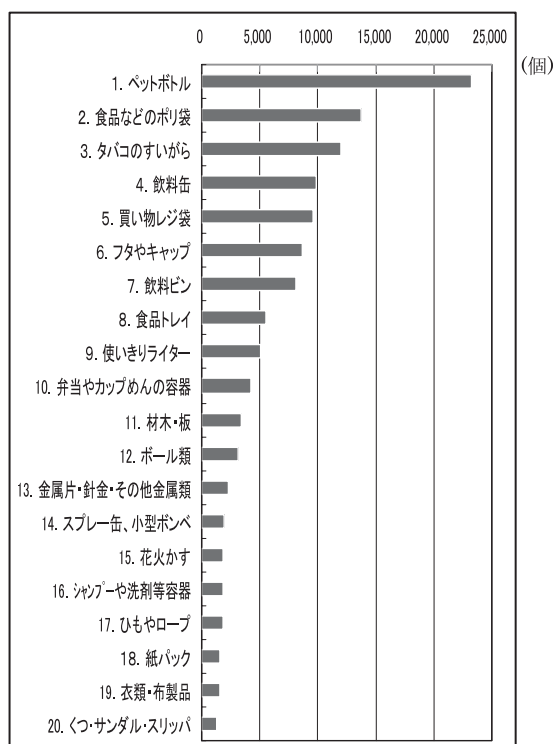
これら微細なゴミはすべて拾い切ることはできないため、実際には、荒川にはこのような破片ゴミが無数に存在しているといえます。プラスチック類は環境中に放置されるとどんどん微細化し、回収が困難となるばかりでなく、魚や鳥等が誤飲するなどの影響が問題視されています。



図表1 破片・細かなゴミの割合

② 近年急増するペットボトル

破片を除いた散乱ゴミのランキングを見ると、最も多く回収されたゴミは、ペットボトルでした。2位以下を大きく引き離しています。(図表2)。ペットボトルが最も多いゴミとなったのは、2009年に引き続き2年目のことです。



図表2 2010年 散乱ゴミワースト2010ランキング

2. 「NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラム」の沿革

1) 設立の背景

① 自然豊かな荒川は漂着ゴミ問題に悩む

東京の下町を流れる荒川は、自然の働きによって、ヨシなどの植物が茂り、虫や鳥、魚などの生き物たちにとって貴重なすみかとなっています。しかし、約1千万人の流域人口を誇る当該河川の水際や河川敷では、漂着ゴミ問題が深刻なものとなってきました。ゴミの堆積が影響し、ヨシ原などが枯れてしまうことで、荒川本来の豊かな生態系の喪失が懸念されてきました。

② 荒川通水70周年を記念して活動を開始

当活動は、1994年、荒川放水路通水70周年を記念して、「荒川クリーンエイド」と称して、建設省関東地方整備局荒川下流工事事務所では、地元の市民団体や河川敷を利用する自治体・企業などが参加する調査型クリーンアップの展開を図りました。

活動の運営当初は、参加した市民団体関係者による実行委員会形式を取っていました。活動規模や範囲が拡大してきたことで、地域の市民団体が中心となり、1997年に任意団体「荒川クリーンエイド・フォーラム」を結成して組織としての基盤強化を図りました。

③ 設立目的を明確化

被害が顕在化する海岸の漂流・漂着ゴミ問題がクローズアップされるなか、東京湾に注ぐ都市河川荒川においても、上流域や支流から流れてくる大量のゴミ問題に打開策を打つ必要性が高まってきました。このような問題意識を受けて、荒川の上流(埼玉県秩父)から下流の江戸川区まで、流域のいたるところで地元市民団体、学校、企業、自治体などの多様な主体とのパートナーシップを実現し、様々な人たちと数えるゴミ拾い活動を展開していくことで、ゴミの削減をはじめ、生物多様性の保全、水質の浄化、子どもの環境教育を実践すべく、以下の目的をNPO法人の定款に明記することとなりました。

定款第3条目的 出典特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラム 定款

- 1 荒川のクリーンアップを通じて川と親しみ、市民の環境保全の意識を高揚すること
- 2 活動を通じて市民が自発的に参画し、アジェンダ21※に示された「行政」「自治体」「企業」など他セクターとのパートナーシップの実現をめざすこと
- 3 荒川沿川住民による河川環境保全の活動を進め、河川管理への市民権を確立していくこと

※アジェンダ21：

1992年、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ市で開催された地球サミット(環境と開発に関する国際連合会議)で採択された21世紀に向け持続可能な開発を実現するために各国および関係国際機関が実行すべき行動計画。

3. 過去の16年間の軌跡

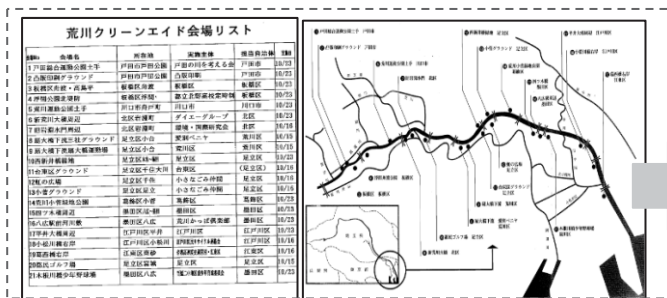
①主体間連携、そして、参加者の飛躍的拡大

～年間2,600人から10,000人の大台へ

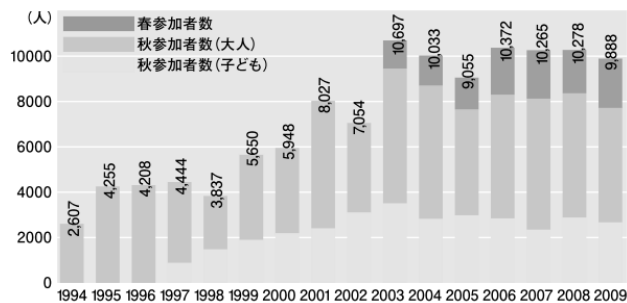
1994年秋の参加者は2,600人ほどでしたが、この事業に参加した地域の市民団体が中心となって実行委員会を組織し、以後、毎年秋に、荒川クリーンエイド〇〇(西暦)と銘打って活動を継続し、1995、1996年には約4,000人が参加しました。

活動規模や範囲が拡大してきたことで、1997年に任意団体「荒川クリーンエイド・フォーラム」を結成し、組織としての基盤強化を図り、1999年

【1994 年の実施概況】



【参加者の推移】

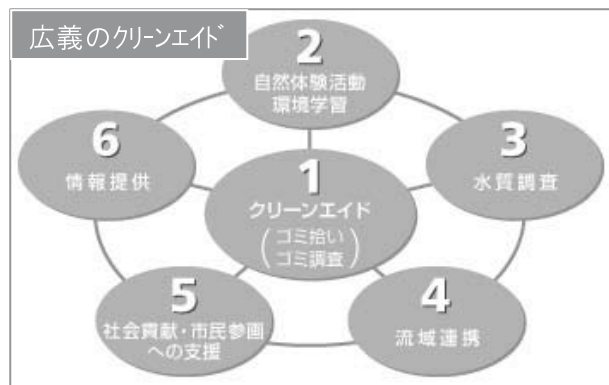


にNPO法人を取得したことで盤石な組織体制の構築が整ってきました。

近年では、荒川上流域の埼玉県秩父市・熊谷市などの自然保護団体が当活動に参加したことで、秩父から東京湾まで流域一環としての大規模な活動を年間約100会場、1万人前後の参加者を得て実施しています。

②狭義のクリーンエイド(ゴミ拾い・ゴミ調査)を構成する諸活動が広義のクリーンエイドを形づくる

ゴミ拾い、ゴミ調査を中心に、様々な活動を実施し、総合的に荒川の環境を考え、市民の意識の向上を図ってきました。下記6つの活動が相互に付加価値を付け、広義のクリーンエイドを構成しています。



a クリーンエイド活動(ゴミ拾い・ゴミ調査)

種類別にゴミを数えながら拾います。ゴミの種類と数を確認することで、参加者一人ひとりに気づきをもたらします。

調査結果を活かして、ゴミの発生をおさえ、ゴミのない社会を目指します。



b 自然体験活動・環境学習

ゴミ拾い・ゴミ調査とともに自然に親しむ活動を進めています。



自然観察会やエコツアーを開催。また、小中学校の総合学習支援や、指導者育成講座の開催、「荒川楽習実践ガイド」「荒川遊学ガイド」などの発行を通じて、荒川を利用した水辺の学習を支援します。

c 水質調査

年に2回水質調査を実施し、市民の手で川の健全性を調べ、身近な川の水質への関心を高めています。



d 流域連携

荒川源流や中流域のエコツアーを実施して、上中流の方々と交流。

流域全体の市民が連携して荒川の問題を考える「荒川流域水環境シンポジウム」を実行委員会で開催するなどの流域連携を継続し、荒川の上流から下流まで力を合わせて課題解決をはかります。



e 社会貢献活動や市民参画への支援

荒川クリーンエイドへの参加や各種研修などを通じて、企業や自治体などで働く人が社会性を発揮する場を提供しています。



f 情報提供

ニュースレター、Eメールニュース、報告集などを通じて活動の状況や成果を広報しています。



4. 17年目(2010年)の成果

1) 荒川クリーンエイド活動の定量的飛躍

2010年に流域各地で実施された荒川クリーンエイドの参加者数、ゴミの回収量等を概観します。

①年間110箇所の活動を流域各地で実施

上流から河口まで、年間延べ120会場の申込(エントリー)があり、雨天中止を除くと110会場が実施されました。これはいずれも過去最高となりました。(図表3)

図表3 会場数(実施回数)の推移

	2006	2007	2008	2009	2010
エントリー会場数	81	106	102	111	120
実施会場数 (雨天等中止除く)	77	100	92	90	110

②参加者1万人を超える

2010年は年間延べ10,675人となりました。過去2番に多い参加人数です。

③約5,000袋(約12t相当)の散乱ゴミ、約1,000個の粗大ゴミを回収

45ℓのゴミ袋に入るゴミを「散乱ゴミ」、入らない大きなゴミ・重いゴミを「粗大ゴミ」と呼んでいますが、2010年は散乱ゴミ4,814袋(約12t相当※)、粗大ゴミ1,030個を回収しました。散乱ゴミ袋数は2008年から徐々に増加していますが、手付かずの場所を新たに整備して拾っているためで、荒川のゴミが増えているわけではありません。

(※)燃やせるゴミ、ペットボトルを2kg/袋、燃やせないゴミを4kg/袋として換算。

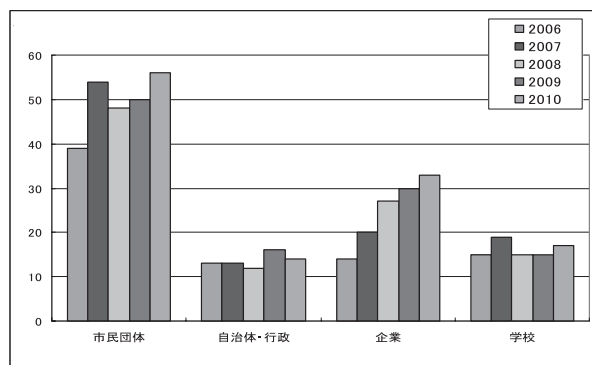
④延べ約42kmを清掃

ゴミを拾った距離は、支流も含め上中流域(笹目橋から上流)の川沿いに延べ約12km、下流域の川沿いに延べ約30km、計約42kmに至りました。これは、東京ー横浜間33km(国道距離)を大きく上回るものです。

⑤増える参加企業

荒川クリーンエイドでは、市民団体、企業、学校、自治体などさまざまな団体がそれぞれ参加者を募り主体的に会場運営をしています。

実施団体タイプ別に会場数(実施回数)を見ると、年々企業による実施が増えています。(図表4)。



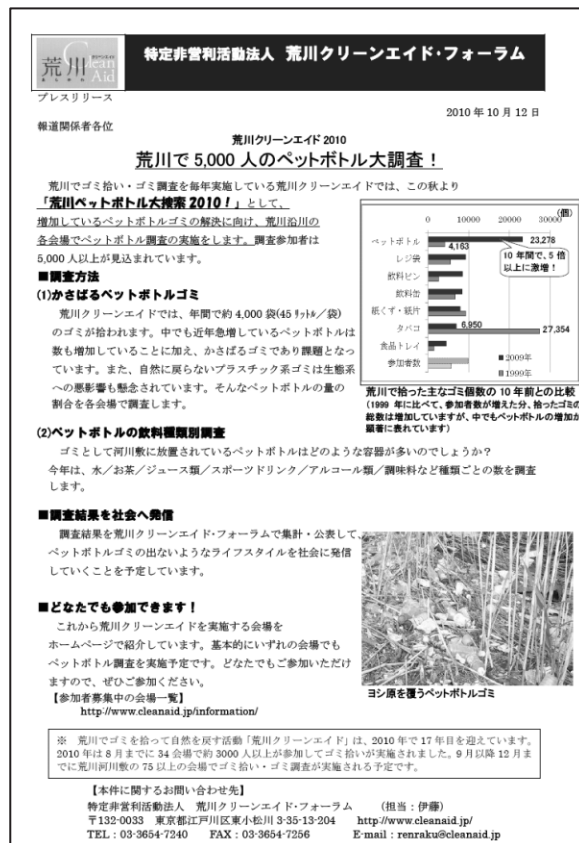
図表4 団体タイプ別会場数の推移

2) 新規業務の樹立 ゴミの発生抑制策と生物多様性を保全する付加価値

①発生抑制に向けた特定テーマのゴミ拾い

甚大化するペットボトルゴミの増加を受けて、2010年度より【荒川ペットボトル大捜索!】と題したゴミ調査を実施しています。本ゴミ調査を通じて、

ペットボトルの内訳(水・お茶・ジュース・コーヒーなど)を特定し、参加者へのふりかえりと飲料メーカーへの問題提起を行う予定です。



②生物多様性の保全という付加価値

荒川クリーンエイド・フォーラムを構成する市民団体の中には、自然再生を志す団体が多数あります。これらの団体が目指すべき姿は、都市河川荒川において、子どもたちへの環境教育を推進し、自然の維持管理を行うなかで、豊かな生物の多様性を回復することにあります。こういったことを踏まえて、荒川クリーンエイドの定義に、「川のゴミを拾って自然が回復するのを助ける活動です」という一文を明文化するようになりました。

一方で、荒川はゴミが散乱する水際だけでなく、河川敷にも多様な生態系があり、環境教育としての大きな要素を兼ね備えています。ゴミ拾いに加えて、更に、直接的な生物多様性の保全を行う活動を加え、広義のクリーンエイドを更にブラッシュアップするということを2010年度に新たに着手しました。

③今後に向けて

当会は、過去17年間、荒川流域における市民と行政、そして、学校、企業といった様々な主体による環境保全活動を行い、17年目にして更なる飛躍を遂げたものです。

しかしながら、ゴミの発生を抑制することや、年間参加者1万人を更に増やすといった明確な成果が求められています。前者においては、増加するプラスチック系のゴミをどう抑制するかが大きな課題となっており、後者においては、荒川流域の人口1千万人分にして、1万人の参加者というごくごく限られた枠をどうさらに普及させていくかが課題となっています。

2年後の2013年に20周年を迎えるに当たり、これらの課題に対して、着実に成果をあげることが今後の目標設定として重要になっています。大きな課題ではあるものの、こういった努力や成果の積み重ねが、「里川」の創造につながり、持続可能な荒川クリーンエイドを実現するものであると思われます。

国土交通省と市民との協働というスキームにおいて、トップランナーを担う当会ならではの課題として、今後更なる飛躍を誓うものです。

文責 糸岡 栄博

クリーンエイド活動が目指す
自然の回復を、より直接的かつ具体的に！

特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラム
プレスリリース

2010年10月15日

自然再生を目指す主体間連携
～様々な業種・業界企業、市民団体、学校などをNPOが支援～

特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラムは、民間企業や学校、地域の市民団体などと協働し、9月下旬から11月にかけて、東京都江戸川区小松川自然地でセイタカアワダチソウなどの外来種の除草や、ヨシ刈りの実施、いちは、河川環境の生態系の学習に資する自然環境教育を実施します。参加企業においては、ビルシステム会社、監査法人、食品メーカー、地元中小企業など様々です。

■外来種の除草
小松川自然地では、アレチウリ、オオバコ、セイタカアワダチソウなどが目立って見受けられます。特にセイタカアワダチソウは異常に繁殖しススキなどの在来種と競合しています。他の植物種の健全な自生を促すため、徹底的に除草を行うことが必要です。11月7日（日）、11月20日（土）ともに船橋橋周辺で実施予定です。

■ヨシ刈り
年に1度程度、秋から春にかけて立ち枯れの時期に、翌年に新芽を育てる効果があるため刈ることが大切だとされています。また、夏場に吸収した大量のリンなどが再度川へ戻ってしまうことを防ぎます。本活動は、11月20日（土）に船橋橋周辺で行う予定です。

■自然環境教室
河川敷やヨシ原、そして干潟において形成する生態系を学ぶために実施します。樹生と生き物の関わりを通して河川環境の生物多様性について学びます。10月23日に、鳴く虫の観察会を通して樹生との関わりを体験します。

■どなたでも参加できます！
詳細は、ホームページで紹介しています。どなたでも参加いただけますので是非この機会に小松川自然地を訪ねてください。

【本活動に関するお問い合わせ先】
特定非営利活動法人 荒川クリーンエイド・フォーラム (担当：糸岡)
〒132-0033 東京都江戸川区小松川3-35-19-204 <http://www.cleanaid.jp/>
TEL: 03-3654-7240 FAX: 03-3654-7256 E-mail: renraku@cleanaid.jp

小松川自然地で試験的に実施。結果をパネルにまとめ
荒川知水資料館や江戸川区水辺交流会で展示

活動紹介：外来種の除草＆ヨシ刈り

外来種の除草
【荒川下流の外来植物】
荒川下流での植物調査では、主に外来植物としてアレチウリ、オオバコ、セイタカアワダチソウ、オオモミジなどが確認されています。
これらの外来種には、その生息域を分布拡大して在来種の生育環境を損なう危険性があります。

セイタカアワダチソウ
アレチウリ
オオバコ

ヨシ刈り
【ヨシの役割】
ヨシの水中の茎に付着している微生物が、水の汚れの元となる有機物を分解します。
また、ヨシは、地下茎から伸びる根を通して、窒素やリンを養分として吸収して生育します。
※ヨシ刈りが多くなると、川の底が露出し、底質が変化し、底質の劣化や汚濁の原因にもなります。
ヨシが適切な窒素やリンを吸収することによって、川や海の富栄養化を防止し、健全な生態系を維持することに役立っています。

【管理を行うに当たって】
・いつの間にか繁殖した外来種は、定期的に草刈りを実施し、かつ数年間継続して刈り続ける必要が出てきます。
・一方、荒川では、外来種を食べて生態系が崩壊されています。
・一気に除去するのは難しく、外来種と関係を持つ在来種に配慮し、慎重に、燃やす生態系を取り壊さないことが重要です。

【優勢だった外来種を刈ること
で、顔を出した在来種】

【ヨシを刈ること、拾えなかったゴミが出てきた】

【刈り取った草】
定期的な維持管理にはボランティアの力が重要だとされています。皆さまのご支援をお待ちしております。